

第 4 章

公開授業・公開検討会 (ベストティーチャー賞)



第4章 公開授業・公開検討会(ベストティーチャー賞)

1. ミニ公開授業・ミニ公開検討会

ミニ公開授業&ミニ公開検討会登録授業(前期)

授 業 名	担当教員
春からのキョウヨウ教育必勝法 A(学際)	杉原 真晃
フィールドワーカー 共生の森もがみー(総合)	中島 勇喜

ミニ公開授業&ミニ公開検討会登録授業(後期)

授 業 名	担当教員
横から見た情報科学(総合)	横山 晶一
秋からのキョウヨウ教育必勝法 A(教養セミナー)	杉原 真晃
フィールドワーカー 共生の森もがみー(総合)	中島 勇喜

ミニ公開授業・ミニ公開検討会アンケート結果

授 業 科 目 名 :

授 業 者 担 当 者 :

授 業 日 時 : 月 日() : ~ :

設 問 1 今回の授業の感想を自由に記述してください。

設 問 2 今回の授業を公開・参観して、ご自身の授業をどのように振り返られましたか。何でも、自由に記述してください。

設 問 3 ミニ公開授業・検討会はいかがでしたか。何でも自由に記述してください。

【前期】

ミニ公開授業 1

授 業 科 目 名 : 春からのキョウヨウ教育必勝法 A(学際)

授 業 者 担 当 者 : 杉原 真晃

授 業 日 時 : 5月30日(金) 8:50~10:30

○授業者のアンケート

設問 1 について

時間との戦いだった。

設問 2 について

少し難しい内容を扱ったため、学生はもう少しまとめ・考える時間がほしかったのではないかと思います。

内容をすべて文字化しているわけではない(口頭で説明

する分を残してある)ため、授業者の私はわかっているけれども学生は理解できていない内容やそれぞれの内容のつながりがあったかもしれない。

次週にフォローしなければならないと考える。

設問 3 について

自らの授業を客観的に振り返ることができ、授業改善におおいに役立つと感じる。

また、他先生からのコメントを聞くことで、授業内容および方法について、自分ひとりでは思いつかなかったアイデアが浮かんだので、実りある時間となった。

○授業参観者のアンケート

参観者 1 : 人文学部

設問 1 について

教養教育の中で、教養教育を考えるという入れ子構造になっているテーマ設定がまず面白い。自分が受けている教育の意味を学生自身に考えさせようというのは、きわめて重要なことなので、必修にして、杉原先生に担当していただきたい・・・というのはちょっと無理ですか。

設問 2 について

Worksheet を毎回書かせて、それを毎週コメント付で返却するのは大変な労働で、コマ数の多い私には困難な気がする。もっと暇になったらやりたい。

設問 3 について

公開授業はおもしろかった。検討会ではいつもより厳しい意見が多かったが、授業担当者がしっかりと答えられるような場合にはそれも良いのではないかと思います。

参観者 2 : 人文学部

設問 1 について

近年初年次教育の役割が重要視されている中で、新入生向けの大学教育・教養教育の意味を考えるこのような授業の存在意義はきわめて大きい。ただ「学び」に関する授業の内容を、どう設定するかは決して簡単ではないであろう。杉原先生の教育実践の中で明らかになった点について、FD研修などで発表していただき、共有化できれば素晴らしいのではないかと。

設問 2 について

一方的に講義するのではなく、時々学生に話しかけて注意を引きつけるスタイルは好感が持てた。しかし、自分が同じようなことを試みた経験では、学生の反応が弱く、空振りに終わることも多かった。講師が私のように年寄りで堅い感じだと、いきなり話しかけられても構えてしまうのかもしれない。もちろん学年や学生の構成によっても異なるだろうが・・・。

設問 3 について

今回は自分の授業と重なってしまったため、検討会に出席できなかった。これまでの経験では検討会で学ぶことが

意外に多く、今回も授業参観だけで、終わってしまったためにやや欲求不満状態であった。授業を見ただけで、検討会をパスしてしまうのはもったいないと痛感させられた。

【後期】

ミニ公開授業 1

授業科目名：秋からのキョウヨウ教育必勝法 A
(教養セミナー)

授業者担当者：杉原 真晃

授業日時：10月24日(金) 14:40~16:10

○授業者のアンケート

設問 1 について

設問 2 について

設問 3 について

○授業参観者のアンケート

参観者 1：人文学部

設問 1 について

作成資料のサンプルがわかりやすい。

学生の相互評価が計画書の改善につながっている。

LMS を利用することにより、グループ外の学生との情報共有ができるようになってるのがよい。

BGM があるグループワークは新鮮だった。

設問 2 について

人文学部でフィールドワーク(グループワーク)科目を担当しているが、学生による自発的な意見交換を促進する手法に改善の余地があることがわかった。

設問 3 について

参観者 1：その他

設問 1 について

活発にディスカッションが行われているのが印象的(本の実物を持ってくる学生複数)

他の教養の授業を受けたり、サークルや部活に取り組んだり、アルバイト先等で学生は自分なりの問題関心を発見するものと推測されるが、自分の問題関心を堅くなりすぎずに語れる場として機能しているように感じる。ストレッチのような雰囲気がある。

授業外での学習の仕掛けや支援が手厚いからこそ可能と思われる。

設問 2 について

前回と今回を通じて授業中に杉原先生が何かを見取ってメモされているか、何を深まりと考えられているかが大学での授業の経験のほとんどない自分には興味がありました。

話している学生さんが今探求しているとも、話していない学生さんが探求していないとも言えないので、丁寧なフォローが必要だと感じました。(実際されているとのこと)

設問 3 について

ベストティーチャー賞の授業(英語森田先生)の時にも感じたことではありますが、授業以外に学習機会をどう偏在させているかが授業の特色を成立されていると感じた。

参観者 3：その他

設問 1 について

いずれかのコマで「情報の探し方」及び「情報の評価」についての教授が必要。

実践のみならず、プレゼン技法の理論の教授も必要ではないか。

設問 2 について

設問 3 について

グループ学習が容易に、やり易い教室が欲しいところです。

情報源としての、オンライン百科事典(Japan Knowledge)がこの授業に有用だと考えます。

参観者 4：学生

設問 1 について

自由なテーマ設定から学生のみグループでの討論という形の授業でしたが、この形は学生の積極性や集中力を高めるという意味で非常によい授業だった。

設問 2 について

設問 3 について

今まで受けるだけの立場の授業を改善するという立場で臨むと新しい視点・考え方が見つけられた。

参観者 5：学生

設問 1 について

学生一人一人が真剣に考えていた。同じ一年生として自分が恥ずかしくなりました。先生のアドバイスはその問題点の本質などをついていて、学生の大きな助けとなつてるように思いました。「急にグループを作る」という作業はけっこう勇気があることなので、いいと思います。

設問 2 について

設問 3 について

考え方・話し方が大人。ポキャブラリーが豊富で、自分もああいう風に話せるようになりたいと思いました。

参観者 6：学生

設問 1 について

説明を分かりやすくしようとする意識が伝わってきました。すごく大事なことだと思います。

相手の目を見てゆっくりしゃべる様子がすごく良かったです。グループを回ってアドバイスを特に毎回しないことが驚きました。私はプレゼンに慣れない頃は先生(スペシャリスト)の指針がありがたかったです。(個人的な意見です。)

設問 2 について

設問 3 について

新鮮な経験でした。

参観者 7：学生

設問1について

一年生の初探求で個人テーマは学部がばらばらになりグループワークがやりにくいけれど、他人の内容を真剣に聞いていて感心しました。中間発表時の個人的アドバイスを先生ならどうされるかが聞いてみたいです。

設問2について

他学部の人の興味を持っている研究内容を聞く機会がなかったです。かなり自由度の高い授業でした。

設問3について

最終発表を聞いたり、資料(レジュメ)を手に入れたりはできませんか。気になります。

参観者8：学生

設問1について

一年生のうちから個人で設定して研究が出来るのは貴重な経験になると思う。私の大学ではこういう形式の授業はなかった。そして、個人に少人数のグループの中で聞くのは身近であって発言しやすいと思った。

設問2について

今回の授業は先生から与えられるものであるという事を根底から変える能力を持った授業だと思った。今までは新しい発見がないまま、ただ受けていたが、これに疑問を投げかける形となった。

設問3について

公開授業は他人から見られる目というものを養うよい機会になる。検討会を行うのはその他人の目を集めて、言葉にするのはよい。

参観者9：学生

設問1について

学生が主体的に参加していた。立命館は授業に対して消極的なので。

細かい点まで配慮されていた。(BGM やタイムスケジュールの明記)

喋る人が偏った場合にうまくリードする人がいなかった。「答えのない課題」に対してアプローチする授業なので、軌道が逸れないように運営していくのが大変そうだった。

設問2について

早く帰りがっている学生がいなかった。少なくとも終了時間まではいなかった。

「学生のことを考えてくれている」という印象を受けて授業に對しやる気が出る。

設問3について

教員や職員の考え方、授業の方針がわかった。発言しやすい環境をつくってくださってありがとうございました。

自分が受けている授業がどのように運営されているのか、考えることが良いことなのか、わからなくなった。

参観者10：学生

設問1について

テーマ設定、授業進行など学生の自由度がかなり高い授業方法でありながら、学生一人一人が高いモチベーションを維持している点が非常に印象的でした。

設問2について

設問3について

他大学に実際に開講されている授業に参加させていただき、大変な刺激であると共に勉強になりました。ありがとうございました。

ミニ公開授業2

授業科目名：横から見た情報科学(総合)

授業者担当者：横山 晶一

授業日時：10月24日(金) 10:30~12:00

○授業者のアンケート

設問1について

気心の知れた先生方に見てもらったが、やはり緊張度は普通の講義より高い。

検討会やその後のメールで、分かりにくい点や見にくい板書などを指摘してもらって非常に役に立った。

設問2について

公開した結果、教え方で特に指摘されて改める点が多いところはなかったの、大体自分の授業のやり方正しいことを認識して、大きな励みになった。

設問3について

試みとして大変よいので、もっと広げてほしい。このアンケートのまとめを公開し、今後に役立ててほしい。

○授業参観者のアンケート

参観者1：工学部

設問1について

ミニツツペーパーの質問事項に対して丁寧に回答しているのが印象的でした。

話し方が平易で分かりやすかったです。黒板の文字の大きさも適切でした。

板書している学生としていない学生が見受けられた(特にミニツツペーパーの回答時)。板書のポイントがわからなかった?

設問2について

全体的に良い講義でした。学生もほとんど板書をしており、90分間の集中力を維持していたように思えます。

特にミニツツペーパーの使い方とその回答の仕方が参考になり、自分の講義でも採用してみようかと考えています。

設問3について

30分程度で適切ではないでしょうか?
米沢キャンパスにも教養教育があるので、これを参観できるようにしてみようでしょうか?(小白川まで行くと半日つぶれてしまう。)

参観者2：工学部

設問1について

工学部情報科学科以外の学部・学科の学生も受講する

科目でした。当然知っていると予想していた知識(N進法)を知っていない受講者が多いことがミニッツペーパーからわかったため、その補足から講義が始まりました。これに30分以上の時間を費やしました。前回の講義で理解が不十分だった点を補足することは有意義だと感じました。しかし、この部分は、専門の講義でもかなり時間をかけないと理解できない内容でした。より短い時間で(詳細はわからないが)、全体として納得させるためにはかなり事前の準備が必要だと思います。

設問2について

学生がどのように講義に集中するかを観察したところ以下のおうでしたので、今後の講義の参考にしたいと思います。

・「話した内容や板書のポイントをノートに取るように」と指示しているとのこと。確かに、写すように指示されなくてもノートを取る受講生は多かった。一方、ノートを取らないで聞いているだけの時間が長い者もいた。

・講義の初め30分の「前回の補足の説明」に対しては、あまり集中していない(ノートを取る受講者は少ない)

・レポートに関係しそうな話題ではノートをとる受講者が多い。

・スライドによる説明が始まると、ほとんどの受講生がスライドを注目する(しかし、ノートを取る者は少ない)。スライドで学生を注目させることはできるが、手を動かさせることは難しいかもしれません。

設問3について

公開授業、その後の検討会は教育改善を意識している教員には有益だろうと感じました。しかし、3~5名の教員が参観のために小白川と米沢を往復するのは、コストがかかり過ぎかもしれません。

参考になる情報について整理して公開するようにしていただければ、参加しなかった教員にも役立つものになるでしょう。

ことさら「公開授業」を設けなくても、興味を持った教員が自由に講義を参観できるようなオープンな環境が望ましいと感じました。そのためには、参観のやり方や、得られた情報の利用についてのルールを決めておく必要がありますが…。

参観者3：工学部

設問1について

この授業はテーマ選択が担当教員に委ねられているので、教える側からの自由度は高い。その分内容設定をきちんと行わないと散漫になるおそれがある。本日のテーマについては、インターネットの発達という点に限られていたので、聞く方には混乱はなかったと思われる。

教養授業全般に言えることであるが、聴講学生の事前知識のバラツキが大きいため、どのレベルを的に説明するかが難しいところであるとの感想を抱いた。

設問2について

板書スタイルの講義は自身のスライド主体のものとは一見隔たりがあるが、講義のスタイルの選択は授業担当者が最もよいと思う方法でやってよいと思う。個人的にはスライド主

体で板書で補足する方法がやりやすい。使用した教室ではスクリーンが黒板の真中であって、その方法を採用しづらいので、改善してほしい。

設問3について

公開授業・検討会自体は意味があると思うが、米沢←→小白川の移動に時間がかかりすぎるのが問題である。今の状態では頻繁に実施するという事に抵抗がある。

参観者4：工学部

設問1について

授業は非常にしっかりしている。しかし、例の使い方と学生の授業参加のためにはもう少し工夫が必要だと思いました。

設問2について

Minutes Paperの使い方は非常に参考になりました。

設問3について

教員全員の講義に5年間一度やるべきです。

<資料>

平成 年 月 日

〇〇学部
〇〇 〇〇 殿教育方法等改善専門部会会長
中 島 勇 喜

「ミニ公開授業・検討会」へのご協力について(依頼)

教養教育では、平成12年度から、授業改善のための「公開授業」と「公開検討会」を実施しております。公開授業と検討会は授業改善のためにとっても有効な方法ですが、自分の授業を不特定多数に公開し、その検討会を実施することに躊躇なさっている先生方が多いのもまた事実です。そこで、本委員会では、昨年同様、教養教育改善充実特別事業の一環として、「ミニ公開授業・検討会」を行うこととしました。

「ミニ公開授業・検討会」は、授業を公開する先生が、自分が決めた特定の日に、気心の知れた3~5人の教員(学部や専門分野は問わない)に、あらかじめ声をかけて参観してもらい、その後にそのメンバーでおよそ30分程度、授業の検討会を行ってもらうものです。あくまでも授業改善のためですので、授業者が授業の改善に利用するのはもちろんのこと、参観者もその授業の良いところを発見し、自分の授業にも活かすよう心がけてもらおうとの趣旨です。本委員会としては、山形大学に「ミニ公開授業・検討会」が拡大し、授業改善が進んでいくことを期待しています。

このたび、平成20年度 期に教養教育の授業を担当されている方全員にご案内した上で、上記の趣旨をご理解いただける方に、「ミニ公開授業・検討会」にご登録していただくこととしました。登録していただいた授業を、委員会のメンバーが参観したり、検討会に出席することはありません。委員会としては、検討会終了後に授業者と参観者にそれぞれA4版1枚程度のアンケートに記入していただき、それを今後の授業改善の資料にさせていただきたいと考えています。アンケート項目としては、授業者と参観者に共通の3つです。

- ① 今回の授業の感想を自由に記述してください。
- ② 授業を公開・参観して、ご自分の授業をどのように振り返られましたか。
- ③ ミニ公開授業・検討会はいかがでしたか。

この「ミニ公開授業・検討会」にご協力いただける方は、下記に公開日時と参観者名を記入の上 月 日 () までに学生センター1階入口横の高等教育研究企画センターBOXへご提出ください。公開日時が未定の場合はその旨お書きください。また、実施当日に参観者が変更になっても構いません。なお、登録いただいた方には、後日、「ミニ公開授業・検討会」のアンケート用紙をお届けします。

登録いただいた授業を事前に学内に案内することはありませんが、授業改善に興味のある方に幅広く公開して実施されることをご希望の方は、下記の記入表の欄にチェック印をつけてください。

また、昨年度の様子については、平成19年度本委員会報告書「教養教育 授業改善の研究と実践」P.235~をご覧ください。(お持ちでない方は、高等教育研究企画センター(内線4707)までご連絡ください。)

----- 切り取り線 -----

私は「ミニ公開授業・検討会」を以下のように実施する予定です。

所属：〇〇学部 氏名：〇〇 〇〇

[〇〇〇〇] 〇〇〇〇〇〇

実施日時：平成 年 月 日 () 校時

参観予定者：

この授業は、参観予定者のほか、参観を希望される方に広く公開します。

<資料>

平成 年 月 日

「ミニ公開授業・検討会」登録教員 各位

教育方法等改善専門部会部会長

中 島 勇 喜

「ミニ公開授業・検討会」の授業者と参観者に寄せて

このたびは、「ミニ公開授業・検討会」の実施にご協力いただき、ありがとうございます。ご存知のように、「公開授業・検討会」は、授業者のみならず、参観者の授業改善においても、とても有効な方法です。

しかしながら、授業方法と同じように、「公開授業・検討会」の最善の実施方法は、いまだ確立されておられませんし、多様な授業方法がある限り、これからも確立されるとは思いません。本委員会としても、方法論についてはこれからも研究を積んでいかなければなりません。授業改善の方法として有効に活用されるならば、多様な方法があつてしかるべきだと考えております。どうか、ご自分流の方法を編み出してご教示いただければと思います。

そうした前提を踏まえた上で、「ミニ公開授業・検討会」が、より実りあるものになるように、ここではこれまで本委員会で研究して参りました、「ミニ公開授業・検討会」を実施するに当たっての留意点を、別紙のようにまとめました。ご参考になれば幸いです。

なお、検討会の終了後に、別添のアンケートを授業者と参観者にご記入いただき、学生センター1階入口前・高等教育研究企画センターBOXへお届けくださいますよう、お願いします。

<資料>

「ミニ公開授業・検討会」を実施するに当たっての留意点

1 今回の「ミニ公開授業・検討会」が終了した後、授業者が授業の改善に利用することはもちろんのこと、参観者もその授業の良いところを発見し、自分の授業にも活かすよう心がけてください。

「また自分の授業を公開しても良い」「今度は自分の授業を公開しよう」といった積極的な姿勢を持てるような、内容のある、明るいムードの「ミニ公開授業・検討会」としてください。

2 授業者は、普段どおりの授業を心がけてください。参観者は授業に介入しないよう、参観する位置についても考慮してください。なるべく、学生の注意が参観者に向かないことが望まれます。

3 参観者は、学生と一緒に授業だけに集中しないでください。大切なのは、授業中の学生の反応です。授業の内容や授業者の行動の変化によって学生は敏感に反応しているはずです。学生は、どのような時に授業に集中し、どのような時に集中力を失っているのでしょうか。

また、今回参観した授業が、15回分（初修外国語の場合は30回）の1回だということに留意してください。今回の授業がその授業の全体ではありません。それと同時に、授業は、それまでに築き上げられてきた学生との関係によって成立していることも忘れないでください。

4 教室の環境などにも留意してください。授業の大切な構成要素です。

5 検討会では、参観者が授業を褒めることから始めてください。授業者のコメントから始めると、ひたすら反省の弁を述べ続けることになる恐れがあります。最初に授業を褒めることが、その後の授業の分析や批評の妨げになることはないはずです。

<資料>

「教養教育ミニ公開授業・検討会」アンケート

授業改善の資料としますので、以下のアンケートにご協力ください。

山形大学教育方法等改善専門部会

授業科目名：『	』
授業担当者：（	）

所属等 （ 授業者 ・ 参観者 ）

所 属 ： （

氏 名 ： （

参観日時 ： 月 日（ ） 時 分～ 時 分

- 1 今回の授業の感想を自由に記述してください。
- 2 今回の授業を公開・参観して、ご自身の授業をどのように振り返られましたか。何でも、自由に記述してください。
- 3 ミニ公開授業・検討会はいかがでしたか。何でも自由に記述してください。

ご協力ありがとうございました。
学生センター1階入口前・高等教育研究企画センターBOXにご提出ください。

2. ベストティーチャー賞

はじめに

Googleで「ベストティーチャー賞」と検索すると、約42,300件のトップに今年度の山形大学のこのベストティーチャー賞の授賞式の模様が登場する(http://www.yamagata-u.ac.jp/jpn/you/modules/topics0/article.php?storyid=289&yu_m=9_2)。驚きである。このことが影響しているのだろうか、本学にベストティーチャー賞の仕組み等についての質問が全国の大学から寄せられている。

筆者も、大学教育に関連する学会や研究会等で会った方々にベストティーチャー賞について質問を受ける。その主要なもの、「学生による授業評価だけで、ベストティーチャーを選んでもいいのですか？英語や物理、体育などの違った種類の授業を学生の評価という同じものさしてベストティーチャーにするのはおかしいのではないですか」というものである。私は「本学は学生による授業評価だけでベストティーチャーを決めているわけではありません。3名(新人賞は2名)の教員の推薦状を基本として委員会で選んでいます」と答える。すると、学生の授業評価によってベストティーチャーが選ばれるという先入観を持っている相手は一瞬まごつかれる。かれらは学生による授業評価によってベストティーチャーが選ばれることに問題意識はあっても他の方法を考えていないのだ。我々の選考方法と基準については下記の通りであるので、それを参照していただきたい。少なくとも、単純に学生の評価を鵜呑みにはしていない。授業の種別や受講生にも配慮している。もちろん、FDへの参加度もである。

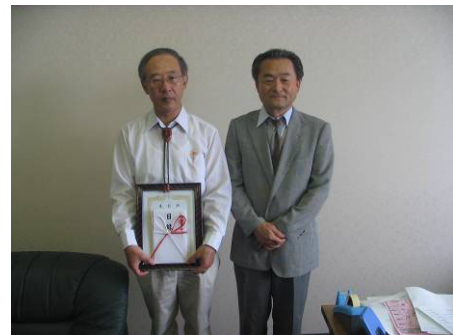
しかし、前年度の第一回目の「ベストティーチャー賞」で「学生による授業評価」を鵜呑みにして推薦してくるケースもあることが判明した。普通は「学生による授業評価」に否定的なのに、全授業を総合評価の高い順にソートをかけて、一番高い授業者を推薦してきたというのを耳にした。こうしたことがまかり通るならば、公然と「学生による授業評価」の絶対的な正当性を認めたことになるし、そもそも同僚の推薦状なんていらなくなってしまう。ただ機械的に「ベストティーチャー」は選ばれてしまう。我々はそれを望んでいない。

そこで、今年は「推薦者は、候補者の授業(専門科目でも可)を実際に参観したうえで推薦する」ものとした。授業の参観を通して、推薦者は候補者の推薦に対して責任を持って欲しいと考えたのだ。教養教育の授業を毎年行っていない教員もいるので、専門科目でも可とした。もし、そうしないと、教養教育の授業に携わる機会が少ない医、工、農の教員はいつまでもベストティーチャーになることはないだろうからだ。

ベストティーチャーの授業は、組織的な教育改善のために公開し、その後に懇談会(検討会という名称ではない)を行うことを義務付けている。今年は第1回目のベストティーチャーの分も含めて授業の公開を行った。それには、「FDネットワーク“つばさ”」の参加校からも参観があり、朝日新聞の全国版にもその模様が掲載された。

我々は山形大学の素晴らしい教員の授業を表に出して共有化していきたい、と強く願っている。その一環として、このベストティーチャー賞がある。奮って同僚を推薦していただきたい。

本ベストティーチャー賞の要項は以下の通りである。本年度の「ベストティーチャー賞」には2名の方が、「ベストティーチャー新人賞」にも2名の方が選ばれた。



ベストティーチャー賞受賞者

地域教育文化学部 三上 英司 准教授

三上氏は、「故事成語から知る漢文学(文学)」(受講生95名)の授業評価において、4.62と非常に高い評価を得ている。氏の授業は、学生の興味・関心を高める工夫がなされている。例えば、毎回授業のはじめに学生にとっても関心の高い話題を取り上げ、漢文学へと結び付けている。また、発問を多く取り入れ、学生が意見を述べることを重視した授業を進めている。このような点において本賞にふさわしい人物である。

農学部 岩鼻 通明 教授

岩鼻氏は一般教育科目「政経・社会」領域で「地理学」を担当し、「韓国の民族と文化」というテーマで講義・教養セミナーを行っている。2000年の南北首脳会談、2002年のワールドカップ日韓共催、その後の韓流ブームなど最新の話題を交えながら、学生に隣国についての基礎知識を興味深く習得させている。継続的な教養教育への貢献に加えて、履修登録者が70名近い講義においてもほぼ全員の学生が出席し、かつ学生による授業評価も非常に高いことから、岩鼻氏が本賞を受賞するに相応しい人物と判断する。

ベストティーチャー新人賞受賞者

地域教育文化学部 齋藤 学 准教授

齋藤氏は、一般教育科目「文化・行動」領域において、芸術を担当し「手しごと(ものづくり)」をテーマとして、芸術的な視点からものづくりを実践的に学生自身の体を通して理解させている。学生に無心で、「ものづくり」と向き合わせることを通して、机上の理論では、決して得られない体験を通じた学習を中心に、卓越した職人技から生み出される作品の「美しさ」や「善さ」を見出す「目」を与えている齋藤氏は、本賞を授賞するに値する人物と判断する。

高等教育研究企画センター 杉原 真晃 講師

杉原氏は、平成19年度の前期に履修生140名の講義、後期に履修生30名の教養セミナーを自主的に開講し、いずれの授業も学生から高い評価を得ている。特筆すべきは、140名の履修生に毎回ワークシートを書かせ、その全てにコメントを添えて返すというきめの細かい指導を行っている点にある。平成20年度には、初年次教育の授業を開設し、本学の教養教育の発展に寄与している。このような点において本賞にふさわしい人物である。

公開授業・懇談会 日程

【公開授業】

日 時 : 平成20年6月4日(水)13:00~14:30
講 義 室 : 第2体育館 2階
授 業 名 : 武道
担当教員 : 竹田 隆一(地域教育文化学部教授)

【懇談会】

日 時 : 平成20年6月4日(水)14:40~15:40
会 場 : 高等教育研究企画センター

ミーティングルーム



懇談会記録

出席者

授業者 竹田 隆一 教授

参加者 小田 隆治 委員

黒 沼 毅 委員

地域教育文化学部 佐多 不二男 教授

一関工業高等専門学校 清水 久記 教授

高等教育研究企画センター 杉原 真晃 講師

酒井 俊典 助教

蜂屋 大八 係長

山際 良弘 係員



参加者 1

・たくさん先生方が参観に来られていた。体育の授業なので、体育の先生が見にくるのは残念。一ノ関高等専門学校、東北芸工大学など、学外からも来ていただいた。

・竹田先生は山形大学教養教育のベストティーチャーなので、とても楽しみだった。

授業者

・居合いだけで学生が飽きる。座ると膝が痛い。なので、手裏剣、弓矢、居合いを取り入れている。

・最初に手裏剣、次に弓矢、そして居合いの指導に入る。

・手裏剣は難しい。

参加者 1

・学生が野放図にも見える。

授業者

・自学自習を基本としている。やったことのないことで、やり方がわからないから、初心者のがわかる。

・手裏剣は、竹筒の中に手裏剣が入っているように投げる、スナップは使わない。けれど、教えない。

・3.6m、2間の距離からさせればいい。10人いれば1人は填る。

・居合いがもう少しできるようになったら、(教員が)手裏剣に行き指導する。手裏剣は、最初に1時間指導に入り、1人1人に対してコツを教えた。

参加者 2

・学生は工夫をしながら実践している。

参加者 1

・女子学生の話の聞いたら、手裏剣が一番おもしろいと言っていた。

授業者

・成功した時の運動感覚だろう。

・武術の伝承は、普通はさせてくれないが、この手裏剣は本当に伝承されている武術だけれども実践させてくれている。

・居合いの刀は1本3~4万円する。刀の保持数は、国立

大学でも1・2の多さ。

- ・鞘がよく壊れるので、鞘付きの木刀を使用するようにした。木刀ならば、鞘が8,000円、木刀本体が2,000円。
- ・鞘に刀を収めるのが大変。

参加者2

- ・集中しないとできない。気合が入っていて、いい授業だった。
- ・「武道は science」という言葉を耳にした(参観に来ていた別武術をしている教員による言葉)が、それが印象的だった。

授業者

- ・武術の中に科学的なものがたくさんあるということだろう。
- ・刀は一点集中。吹き矢は腹式呼吸からおこなう。病院のリハビリにも良い。
- ・弓矢、吹き矢はレクリエーション武道。



参加者3

- ・学生をほめるのが上手だなあと感じた。

授業者

- ・前半の子はうまい。学生はまじめ、武道受講者は特にまじめ。

参加者3

- ・フィンランドや台湾の学生もいた。文化交流の意味も大きい。

参加者4

- ・昨年度も履修していた学生がいた。

授業者

- ・途中で入ってきた子。芸工大に非常勤で行っているが、そこでは3年間ずっと履修している学生もいた。
- ・教える学生が出始めるが、それが逆に困ることがある。流派が違うので。
- ・刀は前に飛ぶことがある。なので、一番前列の学生に刀を持たせる。
- ・他にはレクスポ(レクリエーション・スポーツ)の授業をおこなっている。そこでは、たとえばサリバンディをしている。山形大学にはサリバンディのクラブもあって、現在80名ほど部員がいる。

参加者1

- ・大学設置基準の大綱化以降、剣道から発展して、武道などを取り入れた。
- ・武道やサリバンディでフィンランドと国際交流をおこなっている。SUNY(ニューヨーク州立大学)とのe-learningの英語

版コンテンツにもなっており、大学への貢献も多大である。

- ・成績評価はどのようになっているのか。学生がどのようになったらOKなのか。
- ・他のスポーツは既に上手い・下手があるが、これは同じスタートライン。

授業者

- ・武道は、一所懸命に指導を聞いて、一所懸命に練習したら必ず上達する。それが型の文化であり、そこを評価する。他のスポーツに比べると平等。

参加者1

- ・アスリートを育てるわけではないし。

授業者

- ・日本刀には触れるだけで楽しい。時代劇のようにうまくいかない。運動感覚が磨かれる。

参加者1

- ・これまでのスポーツは上手い人が勝つ。生涯スポーツには向いていない。その点、武道は良い。

授業者

- ・レクスポがそう。生涯スポーツに向いている。附属中学校でもやっていて、「楽しかった」という声を聞く。
- ・今後は、もっと増やそうと思っている。「今日はこれがやりたい」という所に行き、学生が自分で動かして、やりがいを感じるようにしていきたい。

朝日新聞記者

- ・授業の最後が印象的だった。学生が背筋を伸ばしておじぎをする。教員が指導する。武道の精神だなあと感じた。

授業者

- ・最初と最後は礼で終わる。礼は修行法。道教の健康法。これも武道だと言って、しっかりと指導する。居合いでは、また違った礼の仕方をしている。剣道の礼はスポーツ化している。これらの事情も学生には説明している。

参加者1

- ・忍術は？

授業者

- ・スパイ術ですね。正確には「術」ではない。
- ・ヌンチャクや短剣道もある。
- ・馬術もやろうと思っていた。上山に行ってみたが、「馬が疲れる」と言われて諦めた。
- ・武道は人気がないので、護身術と言って受講生を集めている。
- ・体術もやったが、難しい。受ける方も上手くないからキマらない。

参加者1

- ・体育の実技が必修ではなくなって、多くの大学は武道をやめていった。しかし、山形大学ではやっている。ニーズにあうよう努力されている。

授業者

- ・体力を養うという目的から、技術を楽しむという目的に変えている。技術を楽しむ。それが文化である。

公開授業・懇談会アンケート結果

- 設問 1 今回の授業の感想を自由に記述してください。
- 設問 2 今回の授業を公開・参観して、御自身の授業をどのように振り返られましたか。何でも、自由に記述してください。
- 設問 3 公開授業・検討会はいかがでしたか。何でも、自由に記述してください。



○授業参観者のアンケート

参観者 1 : 地域教育文化学部

設問 1 について

童心にもどって、楽しいの一言。

設問 2 について

自然科学の授業に、どのように楽しさを取り入れるか、悩ましいですね。

設問 3 について

参観者 2 : 学生

設問 1 について

一年生のとき受講していたが、やはり面白いし、なつかしかった。

設問 2 について

設問 3 について

手裏剣にもっと真剣に取り組むべし。

参観者 3: 学外

設問 1 について

武道を取り入れていることに感心しています。(学生が集中し手裏剣、吹き矢、弓には工夫して楽しんでやっていることに)

竹田先生が学生の反応を見て、その都度個別に説明されていることで学生の楽しさが伝わってくるように思います。

設問 2 について

学生の集中力をどのように高めるかが大事であること、工学系の科目にも取り入れる工夫をしたいと思っています。

設問 3 について

これまでの学校(高専)では見られない授業を見せていただきました。今後、機会がありましたら参加しますので、ご連絡ください。

【公開授業】

日 時 : 平成 20 年 6 月 11 日(水)10:30~12:00
13:00~14:30

講 義 室 : 213 番講義室(教養教育 2 号館 1 階)

授 業 名 : 英語(C)

担当教員 : 森田 光宏(人文学部准教授)

【懇談会】

日 時 : 平成 20 年 6 月 11 日(水)14:40~15:10

会 場 : 高等教育研究企画センター

ミーティングルーム



懇談会記録

出席者

授業者 森田 光宏 准教授

参加者 小田 隆治 委員

黒 沼 毅 委員

人文学部 鈴木 亨 准教授

一関工業高等専門学校 千葉 圭 教授

高等教育研究企画センター 杉原 真晃 講師

酒井 俊介 助教

蜂屋 大八 係長

山際 良弘 係員



参加者 1

・英語の先生が見ないといけない。英語の改革が進んでいるが、授業を見るのが核となるべき。

参加者 2

・とてもシステムティックな授業だった。

参加者 3

・自分が学生の頃に受けたかった授業。

・細かいテクニックがたくさんあった。

・座席指定を毎回変える。すごくいいアイデアだと思った。

普通は学期で固定してしまう。

そうすると、慣れ、だらけ、なまける学生の相手がうまく学習できない、などが発生する。毎回変えると新鮮。語学のペアワークは難しいと思っていたが良いヒントを得た。

参加者 4

・山形大学の小さな冊子(『あっとおどろく授業改善』)からはじめ、徐々にFDを展開している。昨日突然この公開授業のことを(学内で)言われ、英語の授業を見に来た。

- ・結果的には、見に来てよかった。
- ・英語は標的にされやすい科目。
- ・大学生がペアワークなど果たしてやるのだろうか、と思ったが、学生はやったので、最初からやっていたんだろうなと思った。
- ・2年生くらいになると恥ずかしくなってやらなくなる。
- ・どういう学生が受講していますか？

授業者

- ・前期は人文学部の学生。後期は地域教育文化学部の学生。
- ・習熟度別のクラスで、このクラスは一番下レベル。大部分は推薦入学。

参加者 4

・教材の提示の仕方が、普通の授業は先生が黒板、学生がノートにとる、という形で、学生が聞いている感じがするけれど、この授業はノートを写す要素がないので、純粹に先生のやらせたいことが学生に伝わる。

- ・高校までは「書く」「書いて覚える」というスタイルだが、そういう呪縛から解き放たれている。

参加者 5

・学生には、わかっているけど口に出せない症候群がある。メディアを多様に使っていた。

授業者

- ・学生の家での学習時間が長くなるようにしている。
- ・今日の授業では1つのユニットが3つ入っていて、学生は3つのユニットをこなしてきている。3つの中でどれが小テストに出るかわからない。最初の30~40分はその確認。
- ・後半は前半がキツイので、人と話し合ったりする。個別じゃないもの、楽しいものを。
- ・半年間、1つの文法をじっくりやることもあれば、もっと文法の構造をやらせることもある。

参加者 1

・予習は？

授業者

- ・5語×10点=50点満点
- ・50点×13回が成績の30%を占める。
- ・やらないと単位を落とす。
- ・単語テストも10%。
- ・隣の人と採点しあうので隣の人の点数がわかる。また、後ろから回収するようにしているので他の人の点数も見えるようにしている。
- ・危ない人には声をかけるようにしている。
- ・毎回のテストにかなり重きを置いている。13回の中でベストテン方式をとっている。よかった10回を成績に反映させて

いる。学生にはそれを言っていない。

・リスニングもかなり難しい。学生には難しいからがんばれ、と言う。

・1日1時間、英語の勉強をしなさい、それで小テストでいい点数がとれなければ1日2時間にしよう、など言っている。

・小テスト等をラーニングポートフォリオとしてファイリングさせている。成績をつけるにも都合がよい。

参加者 1

- ・リスニングはTAでもよい。
- ・授業の設計がよくなされている。
- ・授業の後半の部分で、英語の教員である意味がある。
- ・学生がどれだけ伸びたのかを実証してほしい。
- ・授業内容の議論は専門家でおこなってもらい、アウトプットは他(専門以外)にも広げて見せられる。
- ・受講学生数を増やせる。TAを入れれば、ペーパーの採点もさせられる。



参加者 3

・人数を増やすと学生の名前を覚えて、できない学生の把握や声かけなど、細かいケアをする、ということができなくなる。

授業者

- ・昔、失敗した経験がある。
- ・工学部で50数名の授業をおこなったが、カンニングする学生が出てきた。人数が増えるとそういった問題も出てきて、なかなかきびしい。

参加者 1

・30名が良し、というわけではない。30名で崩壊する教員もいる。TAを入れるのも良いだろう。

授業者

・30名だから、あの授業。50名なら、また違う方法をとる。20名なら、それとはまた違った方法をとる。

参加者 1

・目標とするところをはっきりさせる、ということだろう。

・この授業は、グループ発表やブラックボードなど、見えないうちにも入れてトータルで考えられている。単位の実質化。授業外学習も1時間ずつ。

参加者 3

- ・学習記録用紙やテスト採点を隣同士でおこなうなど、自分の学習を自覚できる構造であり、効果がある。
- ・ペアワークは、大学生で語学、というのは難しい。恥ずかしがる、バカにするなど。

・導入の仕方,最初は型にはめて,徐々に自由にしていくとよい。この授業では,その「型」も学生に選べる余裕を残している。選択肢2つが絶妙である。

授業者

- ・英会話学校のノウハウである。
- ・あの場面では楽しくしゃべった気になることでよい。私がコピーしてきたものを見せているので汎用性があるということになる。
- ・時間が足りない時はブラックボード上で。
- ・TOEICが,300点台だが,400点ちょっとに上がるだろう。

参加者1

- ・TOEICについては,教員同士が授業を見合い,他の教員を助けてあげることが大切であろう。能力別のクラスは大学はこれまで嫌がってきた。社会に出れば能力別である。
- ・茨城大学では,センター試験の結果に関係なく,学内で統一試験を実施している。試験の結果が悪い学生は週に2回,良い学生は週に1回の英語の授業をおこなっている。そして再度,統一テストをおこなっている。
- ・隠されて能力が上がることはない。ごまかす時代ではない。

・しかし,学生は一所懸命にやっている。

授業者

- ・去年は3分間はトイレに行ってもいいと言っていたが,あまり外に行かない。
- ・今年はテスト(プリント)を返す時を休憩がわりにしている。

参加者1

- ・授業時間は90分? 45分を毎日?
- ・学生の立場に立って,いろいろと考えてほしい。
- ・英語を使う必然性が学内にない。
- ・アジア人だけでなく,欧米人も入れていく。10人に1人いれば,大きく変わる。

授業者

・工学部ならこういう英語が必要だよ,他の学部ならこういう英語が必要だよと,などを1年生に言ってほしい。そう言ってくれないと,「もう後は英語はないからいいや」とやらなくなる。

参加者1

・1年生に伝わったからといって,今,使わなければ読まない。使えなくても度胸を持つくらいにならなければ。

参加者3

・英語だけではない。国民性の問題かもしれない。

授業者

・山形大学生の1年生はかなり英語をやっている。1年生以上は手が離れるのでどうしようもない。人文学部が一番使わない。動機付けは学部の問題。

・英語の教員が言うのではなく,学部の専門の教員が言うことに意味がある。学生は「英語が必要だ」というのは「英語の先生だから・・・」と考える。

参加者3

・1年生を前にして,専門の教員が,学生が英語をできなくて困っている,ということを伝えることが必要。

参加者1

・しかし,学生には伝わっていない。伝わるのは院生ぐらい。ぶざまな姿,リアリティが見えていない。

参加者2

・国際交流ラウンジなどを活用してはどうか。

授業者

・国際交流ラウンジはあるが,部屋の大きさや留学生の人数など,キャンパシティの問題もある。また言語も英語とは限らない。「この時間は英語の時間」と決めれば,国際交流ラウンジの有効な活用になるかもしれない。授業と関連させるとよいのかもしれない。

参加者3

・公開授業はとてもよい取り組みであるが,宣伝が足りない。メールで一斉に流すなど,工夫が必要であろう。

参加者1

・(ベスト・ティーチャー新人賞に)推薦した学部が責任をもって広報する,といったようなことをしていかなければならないであろう。

公開授業・懇談会アンケート結果

設問1 今回の授業の感想を自由に記述してください。

設問2 今回の授業を公開・参観して,御自身の授業をどのように振り返られましたか。何でも,自由に記述してください。

設問3 公開授業・検討会はいかがでしたか。何でも,自由に記述してください。



○授業参観者のアンケート

参観者1: 人文学部

設問1について

自分もこのような英語授業を受けたいと思わせるすばらしい授業だった。250名の文化・行動の講義とは授業の目標,方法もだいぶ異なり新鮮な感銘を受けた。授業開始時にその日の座席表を提示,隣との会話を課題とするなどとてもいい授業だった。

設問2について

だいぶ授業の様相が異なるが,基本はその授業の明確な目標設定とふさわしい方法,学生の集中力維持など,共通しているはずなので,振り返って参考にしたい。

設問3について

参観者2: その他

設問1について

文法、ライティング、オーラル、小テストなど巧みに構成され、学生もとても学びの多い授業になっていると思います。
ペアワーク、採点など、システムティックに構成されており、無駄のない汎用性のある、とてもよい授業だと思いました。

設問2について

学生にトレーニング的要素をもっと課していても大丈夫なんだなあということに気がきました。

設問3について

とても勉強になりました。ありがとうございました。



参観者3：学外

設問1について

尻上がりに盛り上がっていった印象でした。

一番驚いたことは受講している学生の態度が良かった(授業に集中していた)ことです。

最初に席順を指定した(知り合い同士の組み合わせにならないように?)工夫は適度な緊張が保てた要因だと思います。これは大いに参考にしたい。

設問2について

ヒアリングテープを10回も繰り返し、さらにその都度「まだ聞きたい人は?」と確認しながら進める(親切だと学生が感じるであろう)配慮は参考にしたいと思いました。

設問3について

とても良い企画だと思います。有意義でした。機会があれば又参加したいと思います。

参観者4：学外

設問1について

とてもきびきびとしたテンポで次から次へと進んでいた。パートナー同士が、ためらわずに会話したには驚きました。言語材料がPower Pointで提示されるので集中できる。ノートを取らないので先生の説明に集中できるのは素晴らしい。

設問2について

どうしても黒板に文字を書く(ノートに写す)ことと、話しを聞くことと、考えることがごちゃまぜになり、ポイントがぼやけてしまう。

設問3について

とてもリラックスした雰囲気の中で、緊張感のある授業でした。自分が大学生の頃の英語とは全く異なり、英会話学校での日本人受講生という感じでした。学生同士わいわいと

相談しながら取り組む姿は微笑ましかったです。

先生の指示に従って学生が活動している授業を大学で見たのは初めてです。ありがとうございました。

【公開授業】

日時：平成20年7月11日(金)8:50~10:20

講義室：122番講義室(教養教育1号館2階)

授業名：春からのキョウヨウ教育必勝法A

担当教員：杉原 真晃

(高等教育研究企画センター講師)

【懇談会】

日時：平成20年7月11日(金)10:30~12:00

会場：高等教育研究企画センター

ミーティングルーム



懇談会記録

出席者

授業者 杉原 真晃 講師

参加者 小田 隆治 委員

人文学部 元木 幸一 教授

山形短期大学 滝澤 真毅 准教授

高等教育研究企画センター 酒井 俊介 助教

遠藤 正章 主任

山際 良弘 係員

教養教育担当部長 日野 静雄 部長

教育企画ユニット 矢口 清 ユニット長

学術情報基盤センターユニット 米澤 誠 ユニット長



杉原講師からは、コミュニケーション能力の向上を重視していること、山形大学の教養教育の中でも、他の授業とは異なる色彩の授業として、学生にとって良い刺激になるように心がけている旨ご紹介がありました。

また、杉原講師からは、ワークシートを毎回綿密に添削されており、そのワークシートの記述内容から、その学生個人のコミュニケーション能力の変化を追うことを一番大切にしているとお話がありました。

グループを毎回変えていく行為そのものがコミュニケーション能力を育む営みであるという趣旨を述べられました。

これについては、参観者より、「つい引き込まれるような授業だった、コミュニケーションについて考えながらコミュニケーション能力を身につけさせるというのは有意義であると思われる」という感想がありました。

また、講義の後に毎回相手を変えてグループ・ディスカッションをしていること、「コミュニケーションについて考えさせながら、コミュニケーション能力を身につけさせる」という本授業の狙いが有意義であるとの指摘がありました。

素材を様々に提供して、ディスカッションを学生に委ねているが、学生は素材を提供できるのか？という問いに対して杉原講師は、「最初の方は、堅い内容で Yes/No がハッキリする授業を出す。だんだん、委ねる形に移行していく。ワークシートの内容や答えも変えて行っている。思索の旅に出て欲しい。アバウトな旅に出て欲しい。葛藤して欲しい、葛藤を経て、救ってあげたい。」と授業に対する根幹の部分を語っています。

参観者からは、「ワークシートを毎回書くことを課しており、扱っているテーマそのものが学生の関心がない話ではなく、馴染みのあるトピックスであることが学生の心を掴んでいる」のでは、との感想がありました。

大学の授業を初めて参観したというスタッフからは、「全く受け身の授業かと思っていたけれども、そうではなかった」と、インタラクティブな授業の特徴について感想が述べられました。

また、教養という題材で授業を行っているが、専門教育との繋がりについてはという参観者の問いに関して、杉原講師は、「専門に役立つ教養」という考えが根強く残っているが、それとは異なる＜今だからこそ＞身につけられる教養を、との旨、新たな教養教育への視点を提供していました。

更に、新人賞を受けて、協調学習と共にレクチャーで圧倒する力、講義力もより発揮して欲しい、との今後への期待が述べられました。

他の参観者からは、杉原講師の授業を受けて、他の先生の授業に変化が見られると面白いのではないかと、この授業を受けた学生からの波及効果のお話がありました。

また、この議論を受けて、大学は、将来は、胡散霧消してしまうかもしれない、「解無き問い」を考える根源的な問いを発する場であるということを考え直す意味でも意味深い、というコメントがありました。

そのことは、一般教育科目全体のカリキュラムでの位置づけとして本授業の存在は、大きいという本授業の大学全体のカリキュラムへのインパクトについても言及が参観者よりなされ、ディスカッションが交わされました。

実際に、杉原講師は、5月に集中型の初年次教育も担当され、アカデミックスキルを中心にしたものも担当されており、様々な、方向性から、学生の学びへの可能性にアプ

ローチされていることが懇親会を通じて、共有されました。

また、参観者より、ベストティーチャー新人賞を受賞した理由はどんなところにあるかと尋ねられると、杉原講師は、「学生との相互反応でのコミュニケーションが巧みできたから」述べ、方法論レベルでは様々なバリエーションの可能性も示唆されました。

ストーリー性や、日常性のステレオ起承転結を、更に、学生により味合わせ、深みを出していきたいと、今後の課題の課題を述べておられました。

日頃の綿密なワークシートへの添削や学生とのコミュニケーションが円滑であるからこそ、また、音楽を掛けたり、ワークシートに毎掲載せる絵や今回引用されたアインシュタインの言葉毎回、変えていくという綿密な配慮があるからこそ、可能な授業であるということが懇親会では共有されました。

今回の授業を受けて、将来に通じる問いを投げかける時期を意識的に感じさせることが大切だと議論が行われました。

「今しか、多様性のないディスカッションが出来ないので、それを今、多様なディスカッションの出来る場として学生に集まって欲しい」という杉原講師のメッセージは、学生の将来を長く見据えつつ、授業に対し、「今、ここ、」という大切な瞬間を捉えることを大切にしていることが感じられる、ベストティーチャー新人賞を象徴する印象的な言葉であると思われる。

他大学からの参観者からは、以下のコメントを頂きました。「受け身にしないようにという工夫は自分の授業でもしていたつもりだったが、違う部分もあった。求める学生への学習の志向性、内容も異なる。例えば、自分の場合には均質で、内容も結論を重視せざるを得ない。違いを知ることで、参考になった。」

公開授業・懇談会アンケート結果

設問 1 今回の授業の感想を自由に記述してください。

設問 2 今回の授業を公開・参観して、御自身の授業をどのように振り返られましたか。何でも、自由に記述してください。

設問 3 公開授業・検討会はいかがでしたか。何でも、自由に記述してください。



参観者 1 : 人文学部

設問 1 について

グループディスカッションが意外にうまくできているのに驚

いた。ただ講義はメリハリに欠けるところがある。板書をするなどをして、アクセントをつけた方が良いのではないか。

本田由紀の「専門性重視」の話をもっとしてほしかった。でないと、暗い方向性ばかりで、トンネルの出口がないように感じられる。

設問2について

講義は私の方が上手かな。

ディスカッションに導くやり方は勉強したい。

設問3について

グループディスカッションを30分も見学するのはややつらい。

参観者2：理学部

設問1について

初年度導入教育の必要性を感じているので、この講義を見に来た。非常に有用な講義だと思うが、このタイプの講義を全ての学部の教員が出来るとは思えない。初年度導入教育の技術を持つ教員が担当するのが望ましいと思う。

設問2について

講義の性質が違うので何とも言えない(比較できない)

スタイルは似ていると思うが、関西ノリはできない。

設問3について

学生がディスカッションに慣れている感がある。講義の始めからそうなのか、ここまできたのか。後者であればすばらしい。

教養の教室で、ディスカッションをスムーズに行うのは難しそうだ。

グループメンバーの固定度はどれくらい？



参観者3：その他

設問1について

Worksheetの作成を通じて、学生に「考えさせる」指導がよい。

Worksheetへのコメント返却、そのコメントの紹介が、学生とのコミュニケーションを生んでいる。

始め私語が多かったが、語り始めるにつれ、自然と静かになってゆく様子が興味深かった。

設問2について

毎回Worksheetにコメントする労力に脱帽します。

設問3について

もっと多くの教員が参加してほしいところである。

参観者4：学外

設問1について

「必勝法」という科目のネーミングが了解困難でしたが、「教養」ということを中心に組み立てられた教育学の授業なのだというふうに理解しました。

学生に与える情報の種類、質、量といったことについて、かなりいいに準備をされている感じが感じられました。時間がなかったせいか、講義部分の進行はレジュメ内容の重さのわりにはやや不釣り合いな駆け足であったように思います。しかし、仮に講義部分の理解が完全でなくても、教育やコミュニケーションといった、学生が自分の体験からある程度語ることのできるテーマを含んだディスカッションの設定に救われているということはありそうです。

遅刻してきた学生に目ざとく気づいて声をかけたりする、学生へのかかわりのいいさに感銘を受けました。

設問2について

結論より過程に教育の目標を置くようなディスカッション重視の授業スタイルは、私が相手にしている学生と私の担当している専門分野ではなかなか適用が困難であると思いました。その分野について理解したり語ったりするために学生に必要な基本的な知識や経験の蓄積が十分でないこと、総合大学の教養教育と比べて資格養成の短期大学の学生の志向性がかかなり均質であることから、異なる視点に触れるとか、議論が深まるといった展開になりにくい、少なくとも学生たちに記録を書かせるるとそのような展開が見えてこないのです。

一方、ワークシート課題によるフィードバックは、学生の授業へのコミットメントを高めるという点で有効であることは、以前の経験からわかってはいました。しかし、私の力不足もあるのですが、学生の書くものが相当につたない内容や表現ばかりで、全体に紹介したいようなよいものがなかなか得られないことが続き、手ごたえが軽いわりに手間がかかるということで、やめてしまった経緯がありました。授業に関連して何かを書かせ、それを基にフィードバックをするという授業のシステムの、学生とのコミュニケーションのチャンネルとしての重要性を、今回の授業を拝見して再認識しました。課題の設定などの点でかなりの工夫があるとは思いますが、どのように取り入れられるか、もう少し考えてみようと思います。

ある程度高度な情報を素材として提供して、ディスカッションという調理作業は学生に任せるという、学生への信頼を基盤とした授業の構成は、学生に与える情報をどのくらい下ごしらえするか、ということによってその成否がかかなり左右されると思います。参観させていただいた授業では、下ごしらえはほとんどしていない印象を受けました。私が短大生を相手に授業を担当すれば、下ごしらえだけで授業が終わってしまいそうな感じでした。このあたりのバランスというのは、こういう授業デザインで試行錯誤をしながら徐々に探り当てていくものなのかもしれません。いずれにしても、学生がその時点で持っているものとのマッチングが一番問題になるのだと思います。その意味で、国立総合大学と田舎短大との学生の質の違いということを、思わざるを得ませんでした。

設問3について

懇親会は、小ぢんまりと卓を囲む形だったので、非常に率直な意見交換になっていたように思います。ただ、後半で出ていたやや生臭い話題などでは、刺激的ではありましたが、退屈をすることもまったくありませんでしたが、こんな内輪の話題の中に自分がいてよいのだろうかというような居心地の悪さを感じていました。



【公開授業】

日 時 : 平成20年7月14日(月)14:40~16:10
 講義室 : 134番講義室(教養教育1号館3階)
 授業名 : 韓国を知る
 担当教員 : 岩鼻 通明(農学部教授)

【懇談会】

日 時 : 平成20年7月14日(月)16:20~16:50
 会 場 : 高等教育研究企画センター
 ミーティングルーム



懇談会記録

出席者

授業者 岩鼻 通明 教授
 参加者 小田 隆治 委員
 高等教育研究企画センター 杉原 真晃 講師
 酒井 俊介 助教
 遠藤 正章 主任
 山際 良弘 係員

まず、冒頭に参観者の先生の授業に出ている学生がいたので、今日の授業の感想をきいてみると、「毎回、映像や図を示してくれる。解りやすい。今日の映像も面白かった。」とのコメントがありました。

また、学生が興味関心をもって学生自身が自分に引きつけられるように、時代やかつての日本では、といった細やかな配慮がなされているとのコメントがありました。

岩鼻教授は、地理の授業であることから、「常に、使わない時でも、韓国の地図は教室に張っておくように心がけている。いつも貼っている。小さい観光地図では見えないけれど、なるべく大きな地図を貼るよう心がけており、今回の授業で提示した地図も出来るだけ大きいソウルの地図を持ってきた」と述べられ、地図が教室に張ってあった方が、学生がイメージを掴みやすいとのこと。

また、他の参観者からは、女性の人権問題に際し、映像を切り口に法律の視点や、地理の視点といった包括的な視点から学べるようになってきているとの感想がありました。

岩鼻教授は、映像を授業に持ち込むことについて、「映像視聴20分は短い方。普通は長くても45分くらいに留めてネタにして話にしている。今年の前半は、朝鮮半島から外に出た人の話を取りあげたので、最後に焦点化した。」と映像利用とそれに対する解説の時間とのバランスとバリエーションに配慮がなされているとのことでした。

また、「毎年この授業をやっているので、中身は、作り替えて、出来るだけ映像は毎年、同じものは使わないようにしている。」と映像を常に鮮度の高い新しい素材を保つように心がけていることが、伺えました。

また、他の参観者からは、最初の映像が興味深い。こうした授業を受けていたならば、韓国に行くことの壁は言葉の問題だけというくらい親しみやすく、解りやすい内容であるとの感想がありました。

また、韓国も変わってきたし、韓国も変わらざるを得ない。その事情を知りたい。それを日本と対比すると、日本の置かれている状況も見えるのではないかと、この授業の価値付けも語られました。

岩鼻教授は、後期は韓国映画をずっと見るという形で、前期受けた学生に限った少人数の授業を展開されているとのことでした。

参考までに去年は180人、後期は70人くらいだったとのこと。

「後期は人数が減るので2時間映画を1時間に分割して、解説を30分にして毎回、コメントを書かせるようにしていく。

結構そうすると、色んな意見が出てくる。留学生が必ず何人か出ているので、見たことがあったりするので日本人と違う意見を出してくれたりする。

それを週の初めにコメントを行うようにしていく。そういう形でやっていくとみんな出席をして、熱心に映画を見てくれる。試験はしないで、毎回、出席カードにびっしり書いて貰う感じにしている。

熱心に書いてくれるし、コメントすればするだけ、学生も熱心に疑問に思うことを書いてくれる。」

綿密な対話形式の授業が出来るとのこと。

岩鼻教授は、例年は、前期の方が大人数なので、書かせるのは難しい。前期は講義形式で、後期は対話形式に。年によっては教養セミナーの形でスタイルを展開しているとのことでした。

また、2001年位までには、希望者を募って三泊四日位で、10数人で韓国ツアーに学生を連れて行っていた。後期、入試の期間で行っていたそうです。

現在は、行っていないとのことですが、実際に学生をソウルに連れて行く面白さ、とのこと。博物館に連れて行ったりしていたそうで、実際に諸々もセッティングを整えれば、現地の人と話すこともあるとのこと。

岩鼻教授は90年代の終わりくらいからこの授業を始めたそうです。98年頃に韓国に留学していったので、色々情報収集できたそうで、また、ワールドカップが決まった頃から、日本に韓国の情報が入ってくるようになり、その頃から映像等を教材として取り貯めていって教材として活用してきたとのこと。

参観者からは、他のベストティーチャー新人賞を受賞された杉原講師と同様、昔とは随分状況が変わってきており、双方向が普通になってきている、という感想が述べられました。

また、他の参観者からは、教材としてビデオを使うようになってきている。長く見ると、大学の授業では、本をはじめ、様々なメディアを使ってきたが、映像の持つ迫力。動画の特典というもの非常に大きいとのことが改めて確認されました。

そしてまた、映像を長い映像の中から、授業のポイントとなる映像の3分、5分をどのように切り出していくことの手間の掛かる点や技術的な困難さ、著作権の問題や、公的にはテレビ局に問い合わせるしかないがそういうサービスを提供していなかったり、利用できても条件が様々ある。授業の中で、授業内で私的に使うのは大変であり、どう有効活用していくかについて改めて、問われているという議論が展開されました。

また、岩鼻教授はホームページを活用されているそうです。それは、簡単に作れるホームページでメールアドレスとパスワードを入力すれば利用できるブログのようなものである、とのことでした。

「レポートの課題を載せて、評価が終わった後に、毎回、講評的なことを載せていて、成績の内訳を紹介していて、優・良・可・不可について、学生自身が、自分が、全体のどの位の位置にいるか解るようにしている」とのことでした。

また、時に、評価を間違えると、レポートを付けた時に、学生から修正要求が入る。こちらのミスを学生から、指摘して貰える。そこも含めて良い。学生から直接HPを見てフィードバックが来るケースがあり、役に立っていると言える場合がある。

岩鼻教授によれば、実際には、韓国に興味のある子が来ているということです。必ずしもハングル語を履修している学生が来る訳ではないが、なるべくハングルを取った方が良いとのことでした。

これを受け、参観者からは、「体験と語学と一般教養が結びつくようなものがあると望ましいのでは」との提案がありました。岩鼻先生がかつて行われていた学生を韓国へ引率する体験型学習プログラムを継承するシステム化がうまくいければ、各学部が結んでいる国際交流のように学生が学

べる学習をコーディネートが可能であるという議論に発展しました。

また、「こうした学習システムのバックボーンをマネジメントする力を事務の人が身につけてくれると有り難い」という提案もありました。

岩鼻教授と参観者の間では、こうした試みの仕掛け方をどう創るか、どの様な切欠を作れば、サステナビリティの高い学習システムを実現するかについての闊達な議論が展開されました。

「学生が長期的に一生を送る時に、相対化した視点を学生が持てるか、それを大学全体の戦略性に絡めていけないか。」

「潜在的なものが大学の中にはあるのではないかと、そういうものをうまく活用していれば、大学の中に眠っているリソースが見えてくれば良いのでは」という授業を越えた、正に、「韓国を知る授業」という授業を契機に、国際的な議論が行われました。

公開授業・懇談会アンケート結果

設問 1 今回の授業の感想を自由に記述してください。

設問 2 今回の授業を公開・参観して、御自身の授業をどのように振り返られましたか。何でも、自由に記述してください。

設問 3 公開授業・検討会はいかがでしたか。何でも、自由に記述してください。



参観者 1 : 人文学部

設問 1 について

主演女優のその後のエピソードとDVとの関連が少しわかりにくかったかもしれません。

話すスピードはこれくらいが適切なのでしょう。

設問 2 について

自分は話すスピードはかなり速いですね。

地図(年表)などが載った簡便な参考書が韓国関係であると良いですね。

Video を使いつつ、適度なシンプルさかなと思いました。

設問 3 について

参観者 2 : 人文学部

設問 1 について

板書の文字が大きく見やすい。

映像で見た映画女優の私生活を例に話したことが学生

の関心をひいた。

全 15 回の授業の組み立てを紹介する資料があると今日の授業をよりよく理解できたと思う。

先生がなぜ韓国社会に注目するようになったか等、基本的なことをシラバスで確認してから参観すればもっとよくわかったと思った。

設問 2 について

私の授業は語学なので、重ならないところが多かった。

設問 3 について

後ろの席の学生は寝ていたが、どうするか。自分の場合は起こすのだが。

資料をもとに学生に読み取らせる形をとってもよいと思った。

韓国社会の興味深い多くの面を知ることができた。

参観者 3 : その他

設問 1 について

映像教材を利用することは、現代の学生にとって魅力的であるが、その後の授業展開に見合った内容・時間的に適切な教材の収集・選択が重要となることが分かった。

設問 2 について

設問 3 について

もう少し、人文地理学的な授業内容であってもよいと感じた。

韓国の地図は、学生必携としてもよいのではと思う。



<資料>

平成20年度山形大学教養教育ベストティーチャー賞実施要項
平成20年度山形大学教養教育ベストティーチャー新人賞実施要項

山形大学教育方法等改善専門部会

○趣旨

教養教育において、多くの学生に支持され、質の高い授業を提供してきた優秀な教員に「ベストティーチャー賞」を授与し表彰する。また、近年、本学に採用された新人教員のうち、教養教育において優れた授業を提供している教員に「ベストティーチャー新人賞」を授与し表彰する。

○賞

ベストティーチャー賞及びベストティーチャー新人賞とする。

■ベストティーチャー賞

◎対象者

対象者は次の各号に該当する者とする。ただし、前年度受賞者及び教育方法等改善専門部会（以下「改善専門部会」）委員は対象外とする。

- ①平成19年度において、1つ以上の教養教育の授業を担当した者（非常勤講師を含む）。
 - ②平成20年度において本学に在職している者
 - ③別添「平成20年度山形大学教養教育ベストティーチャー賞候補者推薦書」に基づき、3名以上の本学の教員から推薦を得た者
- なお、推薦者は、候補者の授業（専門科目でも可）を実際に参観したうえで推薦するものとし、当該推薦について本人の了承を得ておくものとする。

◎選考方法

- ①賞の選考は改善専門部会が行う。
- ②改善専門部会は、推薦書、授業改善アンケート、履修登録者数、教育方法の工夫・改善、教養教育改善充実特別事業（FD）の参加・貢献等を勘案し、選考を行う。
- ③受賞者の決定にあたっては、応募件数、科目区分、領域を考慮し、3名以内を選出する。

■ベストティーチャー新人賞

◎対象者

対象者は次の各号に該当する者とする。ただし、前年度受賞者及び改善専門部会委員は対象外とする。

- ①平成17年4月1日以降に本学に採用された者。
 - ②平成20年4月1日現在で40歳未満の者。
 - ③平成19年度に1つ以上の教養教育の授業を担当した者（非常勤講師を含む）。
 - ④平成20年度において本学に在職している者。
 - ⑤別添「平成20年度山形大学教養教育ベストティーチャー新人賞候補者推薦書」に基づき、2名以上の本学の教員から推薦を得た者。
- なお、推薦者は、候補者の授業（専門科目でも可）を実際に参観したうえで推薦するものとし、当該推薦について本人の了承を得ておくものとする。

◎選考方法

- ①賞の選考は、改善専門部会が行う。
- ②改善専門部会は、推薦書、授業改善アンケート、履修登録者数、教育方法の工夫・改善、教養教育改善充実特別事業（FD）の参加・貢献等を勘案し、1名を選出する。

○表彰

受賞者には、表彰状及び副賞として下記の研究費を贈呈する。

ベストティーチャー賞	30万円
ベストティーチャー新人賞	10万円

○応募方法

期限までに、全ての事項に記入した推薦書を、以下の応募先に持参または郵送する。

応募先 山形大学高等教育研究企画センター事務室
(インフォメーションセンター 2階)

締切 平成20年6月6日(金) 17時

「推薦書」の様式は、山形大学のホームページから「教育案内」をクリックし、その中の「豊かな授業を目指して」からダウンロードしていただく。

<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kaizen/ksite/index.html>

○その他

ベストティーチャー賞及びベストティーチャー新人賞受賞者には、すばらしい授業の共有化を図るため、平成20年度前・後期の授業で公開授業を実施していただく。

(本件問い合わせ先)

山形大学高等教育研究企画センター

Tel 023-628-4707

Fax 023-628-4720

E-mail k3cen@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

< 資料 >

平成 20 年 月 日

山形大学教育方法等改善専門部会 部会長 殿

平成 20 年度山形大学教養教育ベストティーチャー賞候補者推薦書

候補者氏名 (歳)

所属 職名

電話

メールアドレス

私たちは、上記の教員を、平成 20 年度山形大学教養教育ベストティーチャー賞候補者として推薦します。

推薦理由	
平成 19 年度 担当科目名	

推薦者名 所属 職名 氏名

推薦者名 所属 職名 氏名

推薦者名 所属 職名 氏名

(署名は、自筆のこと)

< 資料 >

平成 20 年 月 日

山形大学教育方法等改善専門部会部会長 殿

平成 20 年度山形大学教養教育ベストティーチャー新人賞候補者推薦書

候補者氏名 (歳)

所属

職名

生年月日 昭和 年 月 日生

本学への採用年月日 平成 年 月 日

電話

メールアドレス

私たちは、上記の教員を、平成 20 年度山形大学教養教育ベストティーチャー新人賞候補者として推薦します。

推薦理由	
平成 19 年度 担当科目名	

推薦者名 所属
職名 氏名

推薦者名 所属
職名 氏名

(署名は、自筆のこと)

< 資料 >

平成20年度山形大学教養教育改善充実特別事業

ベストティーチャー賞受賞者公開授業

教育方法等改善委員会で実施した、平成19年度ベストティーチャー賞受賞者及びベストティーチャー新人賞受賞者の公開授業を行います。

《公開授業》

日時 平成20年6月4日(水) 13:00~14:30

授業名 一般教育科目 健康・スポーツ領域 スポーツ実技
『 武 道 』

授業者 地域教育文化学部 竹田 隆一 教授

教室 小白川地区 第二体育館 2階



《懇談会》

日時 平成20年6月4日(水) 14:40~15:10

会場 高等教育研究企画センター ミーティングルーム

内容 上記の授業を参観後、当該授業に対する懇談を行う



《公開授業》

日時 平成20年6月11日(水) 10:30~12:00
13:00~14:30

授業名 外国語科目 英語
『 英 語 (C) 』

授業者 人文学部 森田 光宏 准教授

教室 小白川地区 教養教育2号館1階 213番教室



《懇談会》

日時 平成20年6月11日(水) 14:40~15:10

会場 高等教育研究企画センター ミーティングルーム

内容 上記の授業を参観後、当該授業に対する懇談を行う

みなさまの参観をお待ちしております!

主催：山形大学高等教育研究企画センター・山形大学教育方法等改善専門部会
お問い合わせ：山形大学高等教育研究企画センター (023-628-4707)

< 資料 >

平成20年度山形大学教養教育改善充実特別事業

ベストティーチャー賞受賞者公開授業

教育方法等改善専門部会で実施した、平成20年度ベストティーチャー賞受賞者及びベストティーチャー新人賞受賞者の公開授業を行います。

《公開授業》

日時 平成20年7月14日(月) 14:40~16:10

授業名 一般教育科目 学際・総合領域 総合

『韓国を知る』

授業者 農学部 岩鼻 通明 教授

教室 小白川地区 教養教育1号館3階 134番教室

《懇談会》

日時 平成20年7月14日(月) 16:20~16:50

会場 高等教育研究企画センター ミーティングルーム

内容 上記の授業を参観後、当該授業に対する懇談を行う



《公開授業》

日時 平成20年7月11日(金) 8:50~10:20

授業名 一般教育科目 学際・総合領域 学際

『春からのキョウヨウ教育必勝法』

授業者 高等教育研究企画センター 杉原 真晃 講師

教室 小白川地区 教養教育1号館2階 122番教室

《懇談会》

日時 平成20年7月11日(金) 10:30~11:00

会場 高等教育研究企画センター ミーティングルーム

内容 上記の授業を参観後、当該授業に対する懇談を行う

みなさまの参観をお待ちしております!

主催：山形大学高等教育研究企画センター・山形大学教育方法等改善専門部会
お問い合わせ：山形大学高等教育研究企画センター（023-628-4707）